

第2回 大牟田市排水対策基本計画検討委員会

議事概要

議事

1) 課題の把握と整理

委員長：10～100年確率降雨の雨量の程度、1時間雨量でどの程度かを教えてください。

事務局：10年が64mm/h、30年が80mm/h、50年が86mm/h、100年が95mm/hになります。

委員長：令和2年7月の豪雨というのは、おおよそ、50～100年の確率で発生しているという認識ですよね。下水道の整備はどのくらいで整備されているのですか。

事務局：1時間で見るとその程度であるが、3時間、24時間等で見ると規模がかなり大きくなります。公共下水道はすべて10年確率で実施しています。

委員長：ということは、下水道のみに頼った対策は、少し難しいと思われます。図の中に下水道の整備率を示していただけますか。下水道（雨水）はどのくらいの整備率ですか。

事務局：全体区域からは15%程度、事業計画からすれば1/3強だったと思います。

委員長：それは今後も整備を続けていくということですよ。

事務局：公共下水道では、ポンプ場の整備や既存の大きな水路を下水道幹線等に取り込む形で整備を行っております。令和2年7月豪雨以前においては、一定の整備は進んでいるものと判断していました。しかしながら、令和2年7月豪雨を受け、本計画で解消できる部分があるのであれば、進めていく必要があると考えられる箇所は実施していく予定です。

委員長：P19の弱点箇所は都市排水路でしょうか。それとも農業用水路でしょうか。

事務局：都市排水路だと思います。

江口委員：大潮の場合が影響するのではないかと。大潮の場合、どうなるのかというシミュレーションはできるのでしょうか。

事務局：できます。現在のシミュレーションは大潮期、朔望平均満潮位で実施しています。

江口委員：p.8の外力条件が示しているように、大潮の満潮と重なっていない。重なった場合も想定していないといけないのではないかと。

事務局：おっしゃる通り、令和2年7月は干潮時と雨のピークが重なっていました。ただし、諏訪川は、流下する時間がかかるので、満潮と重なった可能性もあります。

委員長：浸水想定は満潮時を想定しているので、そこは理解していただいた方が良いでしょう。

徳永委員：手鎌地区では、河川の堤防は満潮時にも十分に対応できますが、大潮と台風の風が重なると溢れる道路があります。その辺の対策をお願いしたい。北部の方は、田畑、用排水路があり、その用水路を逆流して溢れてきます。大潮の満潮時と台風の風が重なると、まったく水の逃げ場がありません。そういう対策はとれるのでしょ

うか

事務局：河川の水位が上昇し排水できない内水氾濫についての課題は把握しています。今回の課題把握の検討を行っている浸水とは原因が異なるため、対策の検討は難しいですが、可能な限り対策を考えていきたいと考えています。

委員長：22 ページ、整合していない理由として、例えば、ここにお住まいの方が雨の時外に出ていなくて気が付いていないとか、出てもすでに引いていて気が付いていないということはないのでしょうか。

事務局：不整合箇所について、理由として考えられることは、人が少ない、人が住んでいないことによる反応がなかったのかなというのも一つ考えているところでございます。

2) 弱点箇所の抽出

委員長：これは先ほどお示しいただいた重なっている箇所を抽出したということによいでしょうか。

事務局：補足して調査した結果でグルーピングして示しています。

3) 対策の方向性

金子委員：昨年も大牟田で大雨がありました。明治校区ですので企業がございます。(有明沿岸道路の) 健老ICから降りると、いつもそこが浸かる。一般市民の聞き取り以外に、企業の方のところは拾われていないのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

事務局：30 ページをごらんください。こちらについても浸水するという結果がでていて、対策を考えていきたいと考えています。

金子委員：企業とはお話はされているのですか。

事務局：企業とはいまのところお話しはしていません。

委員長：整備している間に同程度の雨が降るという可能性は否定できないので、弱点部を見つけて整備していく優先度、どこから実施していくのが効果的かというのはどうお考えでしょうか。

事務局：対策が出そろった時点でシミュレーションを行い、どのくらい効果があるか、費用がどのくらいかかるか、費用対効果や、早期実現性を総合的に勘案して優先度は考えていきたいと思えます。

委員長：優先度は住民の方が納得いただけるような可視化、なぜ、それを最初にやるかということを示していく必要があると思えます。どれから先にやって解消していくのかをわかりやすいかたちで整理していただけると良いと思えます。

事務局：対策案の策定については、市民協働というところも考えておまして、どういうかたちで住民の声を聴いていくのかというところはあると思いますが、対策案に繋げていきたいと思えます。過程がみえるかたちで繋げていきたいと思えます。

委員長：ソフト対策はどういう方向性をもたれているのでしょうか。

事務局：ソフト対策は31ページのロードマップの下段の方にありますが、まずは、住民の方の災害意識の向上ということで、各地域での防災訓練や研修、学校での防災学習に力を入れ、意識向上をはかりたいと考えています。また、防災情報の提供ということでは、昨年度から運用を始めている防災リアルタイム情報など、災害時にも最新のリアルタイムの情報を送れるようなかたちで取り組みたいと考えています。ソフト対策は継続して実施していく必要がありますので、長期的なスパンで地域と協働で取り組んでいきたいと考えています。

委員長：ハザードマップの特集で、1000年に1回という雨を想定してハザードマップを作るというところが、大牟田市さんではどういう対応になっていますか。

事務局：来年度以降、内水氾濫のハザードマップの作成を検討しているところです。

委員長：100年確率を軽く超えるような雨で浸水想定するので、おそらく低地の部分は浸水するというかたちのハザードマップになると思います。そのときに事業でできる範囲ということと、ハザードマップで達成する目標がかなり乖離してくると思います。ハザードマップの目的はということと、これで浸かることにならないわけではないということを理解していただくことを、ソフト対策をやられるときに、十分説明されておいた方が良いかなと思います。

事務局：いま言われたようなマップになると思います。既に公表している高潮の浸水想定の方は、まさにほとんどの低いエリアが浸水しています。基本的にはハードでは限界があるということで、マップを使って避難の有効性を伝える説明をやっております。当然、内水氾濫のハザードマップがでると、反響も大きいと思いますので、丁寧に各地域まわりながら説明をしていきたいと思います。

江口委員：いまのソフト対策なんですが、拡大防止ということが最後に書いてあります。どこの高台が車の避難所になるのか、これも示した方が良いのではないかと。車と人の垂直避難は考えることができませんでしょうか。

事務局：まず、人の避難の垂直避難ですが、市の避難場所として50か所程度あります。そこらは上層箇所に避難できるようにしています。それ以外について、地域独自で避難場所を見つけられております。例えば、浸水エリアにつきましては、2階以上にスペースがある避難場所の設置を地域独自で進められております。行政だけでもなかなか手が回らないというところもありますから、地域の動きと連携しながら、取り組んでいきたいと考えています。現在、今年度2校区モデル地域を作って、取り組みの助成をやっております。来年度以降、本格的にそういった取り組みを広げていくことを考えています。それから、車の方ですが、高台にある避難所については、学校の運動場などは開放して車も避難できるようになっております。ただし、啓発・周知は十分ではないため、今後、啓発・周知を進めたいと思います。